共創プラットフォーム「こまつリビングラボ」運営スキーム構築業務報告書（概要版）

令和8年3月
小松市
㈱こまつ賑わいセンター

第1章：業務の目的

○ 2030年開館予定の「未来型図書館」における主要機能「こまつリビングラボ」の持続的な運用を目指し、開館前からの共創基盤の構築を図る。
○ 具体的には、社会実装を通じた運営ノウハウやネットワークの蓄積を行い、実践から得た知見に基づき今後の展開方針を策定する。

第2章：共創プロジェクトの構想

2030年の開館を待たない。「今」から公共を育て始める。

(1) 共創分野の整理と基本的な考え方

○ 多様な主体が対話を通じて関係性を築き、試行錯誤を重ねながら新たな価値を生み出していく余地のある領域として設定。
○ 行政課題を起点としつつ、あらかじめ解決策や結論を定めるものではなく、「対話と活動のプロセスそのものが価値」となる共創分野を設定。
○ 複合施設内にとどまらず、芦城公園から小松駅周辺までを一体的な共創フィールドと見なし、空間的・社会的な広がりを持たせることを前提。

(2) 共創分野の設定とビジョン

○ 共創分野の整理と基本的な考え方を踏まえ、3つの共創分野を設定。

小松駅周辺のまちなか再生

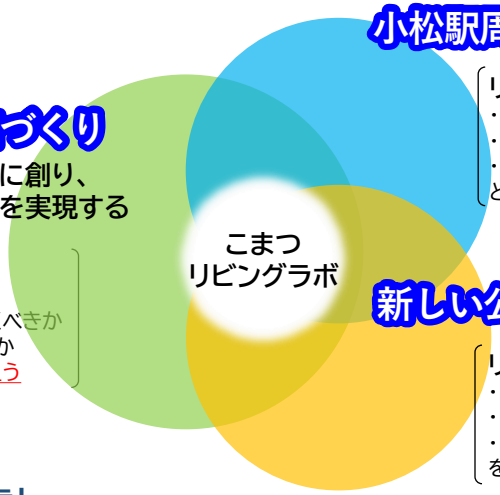
未来型図書館を起点に、人の流れと活動が連鎖する再生モデルを創出する

リビングラボの視点（生活者・利用者視点からの問い）
・まちなかに求められる活動や滞在の質とは何か
・公共空間と民間空間がどのように補完し合えるのか
・小さな実験や社会実験をどのように積み重ねていくのか
というテーマを、多様な主体と共に対話と実践を重ねていく

未来型図書館づくり

利用者・市民と共に創り、育ち続ける公共施設を実現する

リビングラボの視点（対話と試行）
・どのような過ごし方や活動がもとめられているか
・機能や空間がどのように使われ、どのように育っていくべきか
・開館後、どのような人材や仕組みが施設を支えるのか
という問いを、市民と共に考え、形にしていく役割を担う



新しい公共のあり方

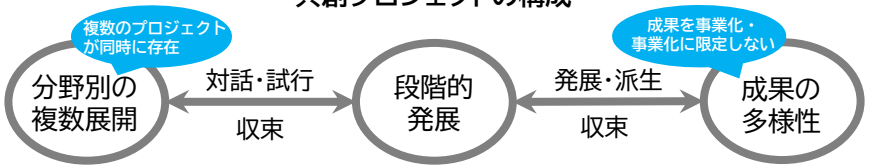
多様な主体が役割を持ち寄り、共に公共を支え、創り続ける仕組みを小松市に根付かせる

リビングラボの視点（転換を支える実践的プラットフォーム）
・立場や肩書を超えて対話できる場
・小さく試し、失敗も含めて学べる場
・公共と民間の間で行き来できる中間的な場
を提供し、個々の知見や資源を持ち寄る「協働型の公共」へ転換

(3) 共創プロジェクトの構成と設計

○ 共創を単発で終わらせず、複数のプロジェクトを連動・継続させる「プロジェクト群（ポートフォリオ）」として構成・設計することを基本とする。

共創プロジェクトの構成



状況に応じ自然に収束・発展・派生する柔軟性を重視
参加者自らの関心応じて関与（共創のハードルを下げる）

考え方や視点の共有
ネットワーク等の形成
次へのプロジェクト

共創プロジェクトの基本構成要素

プロジェクトの趣旨・問い	主な参加主体	活動の形態	想定される成果の形
各共創分野のビジョンとの関係性を整理したテーマや問い	市民、事業者、大学、行政等の関与を想定	対話、ワークショップ、試行的実践、社会実験等、プロジェクトの性格に応じて柔軟に設定	記録、提案、実践事例、運営への反映、次段階への接続など、多様な形を想定

性格や役割が可視化され、運営側及び参加者双方にとって理解しやすい構成を目指す

① 共創分野別の具体的プロジェクト

○ 3つの共創分野ごとに、既実施の取組に加え、今後の転換を見据えた複数の共創プロジェクトを段階的かつ柔軟に展開していくことを想定。

・未来型図書館づくりに関する共創プロジェクト

「wall of Wishes」 フェンスアートプロジェクト	・建設予定地を囲う仮設フェンスを「未来へのキャンバス」として捉え、これまでの記憶とこれからの希望を描くことを目的に市民参加型のアートワークショップを展開。 ・市民の「やってみたい」「あったらよいと感じること」などの想いを言葉やビジュアルとして自由な表現を共有し、開館前から自分たちで育てる公共施設の意識醸成を図る。 ・可視化された想いや問いは、施設の空間づくりや設計、運営を考えるヒントして活用。 ・完成したフェンスアートは、写真・映像等により記録・保存し、開館時の展示や広報、SNS等で情報発信に活用することで、プロセスそのものを共有資産として蓄積。 画像生成AIにて生成（イメージ）
未来型図書館の使い方 プロトタイピング	・設計内容や想定される機能を前提とし、実際の利用シーンを市民と共に具体化・検証すること目的。 ・施設平面図やゾーニング、動線計画、サービス構成等を素材に、利用の具体像を市民視点から試行的に検討。 ・多様な利用主体の視点を取り入れ、使い勝手や居心地、活動の生まれ方に関する気づきを設計や運営に反映。
テーマ配架・本棚づくり プロジェクト	・市民の暮らしや地域の特性、社会課題等を起点にテーマ設定し、本棚の構成やストーリーを考える。 ・選書には、図書館司書の専門性を尊重しつつ、市民参加の機会を取り入れ、「知を編集するプロセス」を可視化。
コレクションハブの企画・ 運営プロジェクト	・個人・団体・企業・大学等が持つ知見や情報等を持ち寄り、共有・編集・発信する仕組みを市民と共に検討。 ・コレクションハブを単なる保存目的の場とせず、対話や学び、新たな起点となる「生きた知の拠点」として機能。
ライブラリー・アクティビティ共創プログラム	・ワークショップや各種イベントを通じで、「本」や「知」を起点とした多様な活動のあり方を試行。 ・未来型図書館が日常的に活動が生まれ、人が関わり続ける場となる目指す。

・小松駅周辺のまちなか再生に関する共創プロジェクト

みんなのガクショク プロジェクト	・こまつアズスクエアの1階テナントを活用し、「学び」と「食」を軸とした共創拠点を開設・運営する取組。 ・学生、事業者、行政、地域が交わる場として、オープンキャンパスラウンジ機能を持ち、交流と滞在の拠点形成を図る。 ・まちなか全体への波及効果を意識した検討・運営を行い、将来的なエリアマネジメントや民間事業展開への示唆を得る。
まちなか交流・滞在案合 プロジェクト	・夜間の時間帯を含めた小松駅周辺の過ごし方を一体的に案内し、滞在の質と回遊性向上を図る。 ・飲食店、宿泊施設、研修受入企業等と連携し、来訪者や求める案内の情報を持ち寄り、共に整理・更新していく。 ・情報収集は手段に過ぎず、継続的に更新・運用する仕組みづくりを重視し、実践と通じて持続可能なモデル構築。

・産官学・市民協働による新しい公共のあり方に関する共創プロジェクト

公共・民間 共創デザイン・ラボ	・市民の暮らしや地域の特性、社会課題等を起点にテーマ設定し、本棚の構成やストーリーを考える。 ・選書には、図書館司書の専門性を尊重しつつ、市民参加の機会を取り入れ、「知を編集するプロセス」を可視化。
市民発・共創プロジェクト	・市民や事業者等が自らテーマを持ち込み、対話を通じて行政や専門家が伴走支援し、プロジェクト化する仕組みを構築。 ・共創を「参加」から「自ら立ち上げる」ものへと広げ、地域に多様な担い手と活動が生まれる循環形成を目指す。

⑷ 運営体制の考え方

① 運営体制設計の基本方針と主体構成

○ 特定の個人の熱量や能力、単一組織の負荷に依存する構造ではなく、役割や機能が整理され、担い手が替わっても持続可能な仕組みを設計。

4つの主体と役割分担

行政
全体方針・制度・計画との接続。公共性・継続性の担保と制度への橋渡し。

市民・事業者
現場感覚・実践力の提供。利用者としての視点と機動力を持った共創の推進力。

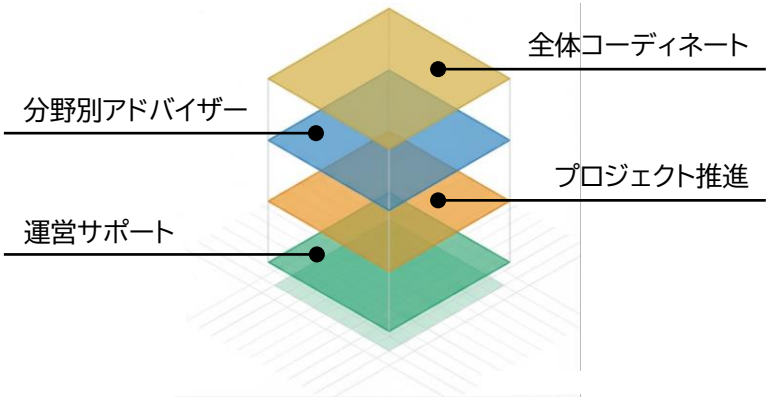
大学・専門家
知見・第三者的視点。対話と検討の質の担保、問いの整理、合意形成の補助。

㈱こまつ賑わいセンター
実務統括・現場運営。都市再生推進法人としての機動力を活かしたプラットフォームの中核。

主体	位置付け
行政	・施策の全体方針や予算・事業スキーム等の整合性を確保し、将来的な施策展開や事業実装につながる　ための制度・事業との接続点を担う。 ・公正性、透明性を確保しながら運営するよう状況確認や関係主体間を調整。
市民・事業者	・利用者視点や現場の課題感、実践に向けた機動力を持込む共創の中核的な推進力。
大学・専門家	・リビングラボの理念や方法論等の専門的知見で、プロジェクト設計等の質を高める。 ・対話を前進させるための第三者的視点、問いの整理、合意形成の補助を担う。
㈱こまつ賑わいセンター	・都市再生推進法人としての立場を活かし、共創プラットフォーム全体の実務総括及び現場運営を担う中核的主体として位置付け。

② 機能としての役割分担

○ 特定の個人の熱量や能力、単一組織の負荷に依存する構造ではなく、役割や機能が整理され、担い手が替わっても持続可能な仕組みを設計。



機能名	役割の性質	具体的タスク	生み出す価値
全体コーディネート	俯瞰と統合	重点テーマ設定・施策接続	プロジェクトの方向性決定
分野別アドバイザー	品質担保	図書館情報学・都市再生等の専門知見	施策の制度・価値向上
プロジェクト推進	実行と巻き込み	企画具体化・実務運営・関係者調整	現場での確実な具現化
運営サポート	基盤構築	参加者管理・記録・情報発信	透明性とデータの蓄積

③ 人材・組織体制の強化に向けた考え方

○ こまつリビングラボは、対話と実践を続ける「共創の場の運営」を本質とし、安定的な運営を推進するための体制強化を図っていく。

専門人材の配置	人と活動をつなぎ関係性を育むコミュニティマネージャー等の専門人材を配置
横断的マネジメントの導入	複数分野で並行する業務を、組織として横断的に管理、支援
段階的な組織強化	賑わいセンターの段階的に人材確保と組織のアップグレード

コミュニティマネージャー（担う役割）

- 共創プロジェクトにおける **参加者同士の関係づくり**
- プロジェクト間の **情報共有・連携促進**
- 新たな参加者や **テーマの掘り起こし**
- 活動の **記録・可視化** ＆ **情報発信** への接続

(1) 実践の位置づけ

○ 未来型図書館は、多様な主体が共に育て続ける「成長し続ける公共施設」を目指し、開館前から共創の実践を積み重ねることに価値がある。
○ 施設整備と並行して、対話と試行（社会実装）を繰り返すことで、開館後の運営の土台となる「関係性」と「方法論」を事前に育てていく。
○ リビングラボとの観点では、当事者意識を育み、実践や検証を通じ最適な運営手法を見出し、共創プロセスを組織の知見として蓄積していく。

(2) 対話の場の設計の考え方

「参加者」から「当事者」へ	参加者を単なる「意見を言う人」ではなく、未来の利用者や発信者等として位置付け、市民が自ら司会進行やファシリテーターを担うなど、参加者の主体性が発揮されやすい場を設計。
目的に応じた多様な手法	ワールドカフェ（※1）やフィッシュボール（※2）など、テーマや参加者に合わせた手法を組み合わせることで、偶発的な出会いやアイデアの連鎖が生まれ、自発的な交流を生みだす。
「結論」より「次のアクション」	立場が異なる人が交わる中で、互いの認識の違いへの気づきや、次の実践につながる問いを持ち帰ることが重要であり、関係性が育ち、思考が更新されることで、次の活動の種が生まれる。
安定した運営支援	賑わいセンターが事務局となり、調整や記録を担うことで、参加者の安心して対話に集中できる環境を構築。

(※1)ワールドカフェ　：リラックスした雰囲気で少人数対話を繰り返しグループ替えしながら、参加者全員の知恵を引き出し共有する話し合い手法
(※2)フィッシュボール：内側の小グループが円形に座り対話し、周囲を参加者が取り囲んで膨張・交代することで、多人数でも深い対話と参加を両立させる技法

(3) 対話の実施概要（リビングラボの実践）

未来型図書館づくり

多様な世代が参加し、施設への愛着を先取りして育てる利用者協働の実践
(1) ミニリビングラボ（大学生・高校生）＜全3回　延べ参加者56名＞
大学生：学生アンバサダーとして、若い感性を活かしたPR手法を提案
高校生：芸術コースの創造性を公共に接続し、デザインによる社会参画を提示
(2) リビングラボ（フェンスアート）＜全2回　延べ参加者158名＞
アートの空間編集と子供から大人まで関わる開かれた共創プロセスを構築

小松駅周辺のまちなか再生

学びと食を軸に、市民・学生・事業者が交わる拠点を生活者視点で具体化
(1) みんなのガクショク＜全4回　延べ参加者94名＞
未来型図書館を単体ではなく、駅から続く「にぎわい回廊」の拠点と定義
サードプレイスとしての条件を議論し、居心地や実装可能性を検証
未来の新聞記事作成を通じ、個人の想いを「共有可能なビジョン」へと変換

(4) 実践から得られた成果

○ 令和7年度の実践を通じ、未来型図書館の開館前であっても多様な主体が関わる「共創」が具体的に成立することが実証。

実践から得られた4つの成果

参加者の当事者意識の形成	対話を通じた知見の多様性	具体的な場による対話の有効性	中間支援機能の確立
行政がつくるもに意見を述べる関係から、自ら進行や表現に関わる関係性へと移行・進化	若い世代の新しい発想、市民の現実的な視点、事業者の運営示唆など異なる視点を重ね構想をより豊かなものへ更新	フェンスや駅前拠点など、具体的な場所を対象にしたことで、生活文脈に根差した深い対話へと移行	賑わいセンターが企画から運営・発信までを一体的に担い、将来の運営主体としての実務能力を先行的に示した

実践により明確となった課題

社会実装への接続	関与のステップアップ	共創プロセスの資産化
対話で得られた意見やアイデアを次へと接続させるため、施設運営や制度へ反映させる記録・分類・共有・反映のルートを意識的に整備	一度きりの参加で終わらせず、知る・参加する・手伝う・担うへと段階的に関わりを深める参加の導線を構築	短絡的な結果だけではなく、蓄積された関係性・知見・運営方法そのものを持続可能な運営スキームとして評価・育成

第4章：情報発信

単なる「広報」から「参加の入口・記録の資産」へ

(1) 情報発信の目的

○ 情報発信は、単なる周知・告知ではなく、共創のプロセスを社会的に共有し、新たな参加と関係性を生み出す「基盤機能」となる。

情報発信の主な目的

- 活動内容や成果の共有
- 対話と施行のプロセスの可視化
- 新たな参加や関係性の創出
- 未来型図書館づくり当事者意識の醸成

令和7年度 第2回 こまつリビングラボ (2026.3.1)

note

グラフィックレコーディングの一部

(2) 情報発信の目的

○ 各媒体の特性に応じた多層的なコミュニケーションを展開。

SNS
関心喚起・入口形成
即時性と拡散性を活かし、活動の空気感や楽しさをリアルタイムに発信

note
背景理解・知見蓄積
活動の背景、議論のプロセス、参加者の気づきを文脈として言語化し蓄積

視覚的構成
直感的理解
動画やグラフィックレコーディングを活用し、熱量や議論の流れを可視化

(3) 課題と今後の方向性

○ 活動を地域にひらき、プロセスそのものを共有可能な資産（アーカイブ）へと転換していく。

持続性の確保	導線の明確化	非定量的成果の発信	アーカイブの整理	発信主体の多様化
活動の連続性や変化が見える記録体制の構築	「誰が・どう関われるか」を明示し、初参加のハードルを下げる	関係性の深化や意識の変化など、見えにくい成果の言語化	情報量の増加に対応し、媒体ごとの役割分担と集約機能の強化	運営側だけではなく、参加者自身が発信する仕組みづくり

第5章：今後の展開方針

(1) 2030年開館を見据えた共創プラットフォーム

① 2030年開館までの全体展開シナリオ

○ 複合施設の開館を「完成形」とすることではなく、時間軸、空間軸の両面から展開・整理し、共創が継続・発展していくための基盤形成を図る。

第1段階（開館前初期）	第2段階（開館前中期）	第3段階（開館前後）	第4段階（開館後）
小松駅周辺を中心に実践し、運営ノウハウと関係性を蓄積	利用者協働を強化し、駅周辺と芦城公園を接続	2030 施設内外の活動を一体化し、二拠点型プラットフォームへ	未来型図書館を核として共創活動を全体へ波及・定着

② エリア特性を踏まえた展開と二拠点型運営スキームの構築

○ 地域特性に合わせ、プロジェクトの役割を明確に使い分け、性格の異なる2つのフィールドを接続し、相互に学び合い、まち全体に共創を循環。

実践と接続

小松駅周辺エリア

対象：ビジネス層、学生、観光客、事業者
特徴：機動性と試行性を重視。小さく始めて改善を重ねる実証実験のフィールド。

画像は生成AIにて生成

編集と定着

芦城公園・未来型図書館エリア

対象：市民、学習者、地域コミュニティ
特徴：学び、社会課題、公共性の高いテーマを中心に、利用者協働の文化をじっくりと育む拠点。

③ 持続的な運営に向けた5つの柱（総括）

運営の標準化	立ち上げ手順や記録方法の共通ルール化（属人化の防止）
情報発信と資産化	単なる広報ではなく、活動プロセスを社会的な知見として蓄積
財源の複線化	行政予算に加え、民間連携、助成金、協賛など多様な資源を活用
運営主体の連携	PFI事業者（SPC）、小松市、賑わいセンターの連携強化
担い手の循環	「知る・参加する」から「手伝う・担う」への段階的な参加導線設計

④ 今後の具体的なアクション

○ リビングラボを「構想段階」から「継続的に運営される共創プラットフォーム」への発展させていくため、アクションを段階的に進める。

次年度以降のアクション

- **パイロット事業の継続・拡大**（共創プロジェクトの成熟）
- **運用ルールの整備・標準化**（基本ルールの整理と標準化）
- **コミュニティマネジメント機能の強化**（プロジェクト間の接続や記録・発信連携）
- **利用者協働型プロジェクトの体系化**（共創育てる利用者協働の仕組み）
- **情報発信・アーカイブ機能の整備**（情報発信基盤の整備）
- **二拠点間連携の具体化**（両エリアの役割や相互連携する仕組み）
- **SPCとの連携準備**（施設運営への連携ルートの明確化）
- **評価と改善の仕組みの導入**（共創活動の定量・定性評価）
- **財源確保と連携機会の拡充**（運営基盤の安定化、担い手と資源の充実）

「共創」を小松市の新しいアイデンティティへ

未来型図書館等複合施設は、完成して終わる「ゴール」ではなく、まち全体を巻き込みながら共創を育てていく「起点」です。
2030年に向け、2つの拠点が連携し、市民一人ひとりが主体的に関わる「新しい公共」の姿を、ここ小松から地域の内外に発信していきます。